
シンクロ～伝えられない思い～

零・ZA・音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シンクロ〜伝えられない思い〜

【Nコード】

N4725A

【作者名】

零・ZA・音

【あらすじ】

今、この世界には「シンクロ」と言う奇病が蔓延している。その病に掛かってしまった少女と、その病を期に少女に惹かれていった少年の物語。彼女を苦しめる病に、俺は何が出来る……。そして、少年がとった行動とは。

この時代、人は心を病んでいる。
この時代、人は心に秘めた思いを持っている。

それぞれの思いは、同調する。

精神を無意識に共有して、精神を破壊してしまう病気
シンクロ』 通称『

それは、思いにのって感染する不治の病。

「本当……ですか？」

俺はその言葉に絶句していた。

薄暗い部屋で男と対峙する俺は、酷く狼狽していると思う。だが、
そんな事をお構いなしに、

「ええ…… 本当です」

短く、簡潔に話す男。事務的に淡々と話をする男は、手元にある
紙へと目を落とす。

「共鳴者、は」

「…… 貴方です」

その男はまたも短く答える。

だが、その言葉はどんなものよりも俺の胸を深く響いた。

「…… 俺」

「ええ…… 検査の結果、貴方と”シンクロ”しています」

男 医師から告げられる言葉は、骨の髄まで響き身体を揺らし
ていく。

「知つての通りですが、この病気には有効な治療方法はありません。
病状の進行も……」

そこまで言って、医師は言葉を濁して顔を伏せていく。

「……治す方法は本当にはないんですか？」

俺の言葉にゆっくりと首を振る医師。しかし俺も必死に食い下がったが、それ以上は何も話して貰えなかった。

「分かり、ました……」

重い腰を上げ、出て行こうとした俺の耳に、「独り言ですが……」
そう言って椅子が軋む音がした。

俺は部屋を後にして廊下を歩き、階段を上っていく。そこは病室が並ぶ場所。

ここは病院……今俺はその中を歩いている。足は進むべき場所を知っている。

やがて、俺の目に目指す場所が見えてきた。

そこはシンクロ特別処置病棟。

病室の中から聞こえる声。その声は楽しそうに笑っていた。

俺は扉に手をかけ、ゆっくりと開ける。中の声が一段と大きく聞こえる。

「あれ……お兄ちゃん」

扉の音に声が一度止まる。そしてその中から俺に話し掛けてくる声があった。

「うるさいいぞ……廊下まで聞こえてる」

「あつ……ごめんね」

バツの悪そうな顔をして謝る女の子。その周りには数人の女の子が囲んでいる。

いつも見掛ける子達ばかりだ。

「それじゃ、私達そろそろ帰るね」

「えっ？ あ……うん」

少し寂しそうな顔をしたが、笑顔を作り見送る女の子。それに手を振って返す女の子達。

俺はそれを眺めながら、突っ立っていた。

「お兄ちゃん、座ったら？」

「ああ……」

俺は近くにあった椅子を引き寄せてベットの脇に座る。

「どうしたの？ 元気ないよ」

言いながら俺の顔を覗き込む女の子。お兄ちゃんと呼ばれているが、こいつは俺の妹ではない。

こいつは、俺の家の隣の女の子で、名前を美佳と言う。そして…

俺がシンクロされている相手だった……。

「なんでもない……心配するな。美佳」

そう言ったが美佳は、未だ心配そうな顔をしている。

その美香の頭を優しく撫でてやると顔を赤くしてしまった。

「お兄ちゃん！ また美佳を子供扱いするう！」

「お前は、いつまでたっても子供だ」

「むっ！ 違うもんっ。美佳は大人だもん！」

そう言って顔を逸らしてしまった美佳。その顔は不満でいっぱいと言う顔をしている。

そんな美佳を見ながら俺は、胸に痛みを感じていた。

美佳がシンクロを発病したのは一年前。突然苦しみ出し、病院に

運ばれた。

シンク口とは、相手を思う気持ちが強ければ強いほど、その症状は激しくなる病気の事だ。

発病した患者を「発症者」と呼ぶのに対して、シンク口されている相手を「共鳴者」と呼ぶ。症状は、人それぞれだが、代表的なのが精神に異常を起こすケース。発症者は共鳴者の精神に長くシンク口し過ぎると、精神崩壊を誘発させしもう恐れがある。逆に共鳴者が発症者の精神を崩壊させる事も出来る。ただし、シンク口中に外部から強制的に遮断すると、お互いの精神が崩壊して死を迎えてしまう危険性がある。

「分かった……。美佳は大人だ」

「えっ？」

「十分、大人だって言っているだ」

「本気で言ってる？ お兄ちゃん」

「言ってるぞ」

俺の目を暫く見て、どこか納得した表情の美佳。嬉しそうに顔を綻ばせて喜んでいる。

この笑顔をいつまで見れるのだろうか……。俺は美佳に何をする事が出来るのだろうか。

「お兄ちゃん……。先生、何て言ったの？」

美佳の声に俺は我に返り、そちらに視線を向けるが、今は笑顔がなくなっていた。

「別に……」

「……うそ。今日、検査結果出るってお兄ちゃん言ってたでしょ」

美佳の目は俺を真っ直ぐ見つめている。その瞳は儚げに揺れて、今にも消えてしまいそうな不安感を煽る。ああ

適合検査は、一年前にもした事がある。しかし、その時は美佳が発症したばかりで精神的に極端に不安定だったので誰も反応しなかった。シンクロは身近な人で起こる事が多いので、身内や友達をまずは調べて共鳴者を探す事になる。

その後、共鳴者が見つければそれで終わりで、それ以上の対処はない。俺は、探す事に何の意味があるのか分からない、と思っていた。

だが、それは先ほど医師から聞いた言葉により、解決している。

「どうだったの……結果は」

俺は迷っていた。伝えるべきか、黙っているべきか……。

シンクロは心の病気。

ちよつとした精神状態の変化で、病状が悪化する事があるからだ。

「俺は……」

「私は、お兄ちゃんなら……嬉しい」

俺を見つめる美佳の顔は笑っていた。悲しそうな笑みを浮かべ、

「私は、お兄ちゃんと……シンクロしてるなら」

「美佳……」

涙を流していた。

頬を伝う涙は、ゆっくりと落ちていく。顎を伝い、雫となり美佳の手を濡らす。

「お兄ちゃん……」

俺の名前を呼び、瞳を閉じていく美佳。その姿を見ているのが、俺には辛い。

この場から逃げ出してしまいたい衝動に駆られてしまう。

「それじゃ……俺帰るな」

「うん……気をつけてね」

涙を拭いながら答える美佳を、俺は胸に詰まる思いと共に、病室を後にした。

結局、検査の事は言えないままで　俺は、逃げたのだ。

伝えたほうがよかったのだろうか……。

俺が共鳴者　これは変わる事のない事実。でも、俺は美香の共鳴者でよかった、と思っている。

これは、俺にしか出来ない事。他の誰にも任せられない、いや、任せたくない俺にしか出来ない事。

『シンクロを完治させる方法が、一つだけあります……』

そう言って医師が教えてくれた方法　それはあまりにも衝撃的な事だった。

今日も俺は美香の病室に来ていた。

何もない病室に一人、寂しそうにいる美佳は日増しに元気が無くなっているのが分かる。

今の美佳にシンクロする程の精神力はもう残されていない。この一年幾度となくシンクロを繰り返し危険な状態になっていた。美佳のシンクロは少し特殊で、共鳴者には殆ど影響がない。それで今まで俺が分からなかったのだが……。その分、美佳自身の身体には、かなりの負担が掛かるようで、それが今の美佳には顕著^{けんちよ}に表れている。

「お兄ちゃん……もうすぐ、一年だね」

「……そうだな」

寂しそうに窓の外を眺めている美佳。もう、自分では歩けなくらいに身体が衰弱していた。

「私は……もうここから出られないのかな」

「そんな……事」

「次、出る時は……もう」

「美佳っ！」

俺の突然の大声に身体を震わせて驚いていた美佳だが、

「ゴメンね……お兄ちゃん」

「いや……俺の方こそ、驚かせて悪かった」
無理やり、笑顔を作っていた。
笑っている美佳の瞳には涙が浮いている。何を泣いているんだ？
俺に教えてくれないか……。
揺れ動く瞳は何かを訴えかけているのに、俺にはそれを理解する
事が出来ないんだ。

シンクローは発症から、一年までの死亡率が高い。

それは、誰もが知っている事実で、これは可能性の問題なので、
実際に起こるとは限らない。しかし、現に多くのシンクロー患者がこ
の通りになっているのも事実。

美佳が抱えている恐怖　死に向かう恐怖。

それは俺には計り知る事が出来ないもの。俺も美佳の共鳴者だから、
もしかしたら美佳と運命を共にするかも知れない。

でも……俺は構わないと思っている。俺は、この一年でそう思え
るようになっていた。

……俺は、美佳を愛している。

だけど、それは思っただけいけない、伝えてはいけない事。

美佳を苦しめるだけなのだから……。

「お兄ちゃん……怒ってる？」

「ん？……いや怒ってないぞ」

少し安心した表情を浮かべ、美佳は起き上がろうと上体を起こし
ているので、肩に手を廻して座らせる。

「お兄ちゃん……」

その声は真剣、その瞳には力が宿り、俺は胸を鷲掴みにされた感
じがした。

「どう、した……？」

「お兄ちゃん……私、伝えたい事があるの」

静かに響く美佳の声はどこか悲しげに、そして決意のある、そんな感じの声に聞こえた。

「なん、だ？」

「私ね……。子供の頃から……大好きだったの」

「……みか？」

最初に美佳が何を言おうとしているのか分からなかった。だが、更に、

「……一年前の春、私はお兄ちゃんに……告白しようと思ったの」
続いたその言葉に、俺は愕然とした。一年前の春　それは美佳がシンクロを発症した頃。

「多分、その時に……シンクロになっちゃったんだね」

その顔は酷く悲しげに歪んでいく。

美佳は俺を思い、そしてシンクロを発症した　でも、俺はその
当時は美佳の事は……。

「シンクロって……誰かを、好きになる事も……出来ないんだね」

「美佳……」

「だって……だって、好きって気持ちで、病気に……なっちゃうんだもん」

涙が頬を伝い落ちる。止めどなく流れ落ちる涙が、次々と　。

「そんなのって、あんまり……だ、よ」

我慢出来なくなったのか、顔を覆い泣き出した美佳の声は、掠れて寂しく俺の耳に、心に届いた。

誰かを好きになる……それは誰もが当たり前に持っている気持ちだが、それをシンクロは許さない。思えば思うほど　ーシンクロは美佳を苦しめていく。

「私は、おにい、ちゃ……っ！」

「美佳っ！」

突然、胸を押さえ、苦悶の表情を浮かべた美佳は、布団を掴み、

苦しげに息を吐く。

額からは汗が吹き出してきて、呼吸も段々と荒く早くなってきた。
「美佳！ 待つてろ　すぐ、先生を呼んでやるからっ」

俺は枕もとにあるナースコールを掴み押した。何度も何度も無我夢中で押していた。

その間も美佳は苦しんでいる。

なのに、俺には何も出来ない。苦しんでいる美佳をただ、見ているだけだ。

「はあはあ……お、にい、ちゃ……」

「喋るなっ！　美佳！」

「はあ、はあ……わた……し」

次の言葉を発する前に、美香の身体が大きく跳ね上がり、痙攣を始めた。

「美佳っ！」

その時　勢いよく扉が開き、数人の人影が入ってきた。

俺を跳ね除け、美香の周りを囲む医師と看護師達は、忙しく与えられた指示通りに動いている。

そんな中、俺は異分子　とりあえず部屋から出て行くように言われたので、重い足を引きずり病室をあとにした。

「美佳……」

俺の声は、今は誰にも届かない。

俺は、屋上に来ていた。

何も出来ない自分が悔しくて、ここで空を眺めていた。あの場所にいると、自分の力の無さを痛感するだけで、胸を抉られる思いがした。

「美佳　俺は……どうしたらいい？」

空に向かって放たれた言葉に、誰からも返事はない。

「美佳……」

俺は美佳を助けたい。どんな事をしても……俺は、美佳を助けたい。

さっきの発作は、今まで見た発作とは全然違うものだった。

もう、美佳の命は。

「お前を……」

シンクローは発症者と共鳴者が存在する限り治らない不治の病。

しかし 唯一、助ける方法がある。

「俺には……もう、これしか……」

何も出来ない俺に残された、たった一つの出来る事。

何故、共鳴者は探すだけなのか、その意味が分かったような気がする。

「伝えたかった……この思いを」

屋上から見下ろす地上は、明日への光を照らしているようだった……。

朝日が眩しく差し込む部屋で、少女は目を覚ました。

「……あ、れ」

昨日、発作を起こした筈なのに……もう駄目だと思ったのに、と少女は自分の手を見つめながら思っていた。

少女は自分に何が起きたのか、必死に考えていたが思い当たる事が何一つない。

「なんで……わた、し……」

しかし、確実に実感できる変化が身体にある事を、少女は気付いた。

「……え？ う、うそ」

身体の中にあつた得体の知れない不快感が消えている自らの身体

を触りながら、少女はそれを実感していたが、

「……信じられない」

驚きに見開かれていく少女の目は、未だに現状を把握出来てない様子で、腕や顔を終始触っていた。

「……失礼、するよ」

「せん、せい……」

不意に聞こえた音と共に扉が開き、室内に入ってきたのは少女の担当医。

その姿を見た少女は、ただ現状の事を伝えたかった。身体の異変を　これはどういう事なのか知りたくて。

だが、担当医の表情は曇ったまま、俯き加減で

「実は……」

「……う、そ」

担当医の口から放たれた言葉が、少女の胸を抉っていく。

それは、実感してはならないもの。それは、起こってはいけけない事。それは、認めてはいけけない現実。

担当医の口から聞かされた事実は、少女の瞳から涙を溢れされるには十分過ぎるものだった。

発症者のシンク口を完治させる方法。

それは、共鳴者の命を絶つ……ただ、それだけ。

「お、にい……ちゃ」

少女の頬を涙が伝い、流れ落ちていく。それは溢れてはこぼれ、溢れてこぼれ、止め処なく流れ落ちる。

「なん、で……」

少女は、それを認めたくない一心で、首を横に振る。

担当医の静止を振り切り、耳を塞ぎ、全てを遮断して、その事実

を拒絶していた。

「う……そ、でしょ」

涙は枯れる事なく流れて、少女の頬を、顎を、濡らしていく。

愛する人が目の前からいなくなった。その現実が臨界点を越えた少女の耳に、

『美佳……』

確かに聞こえた。

愛する人の声。少女が”お兄ちゃん”と呼んでいた愛する人の声。

「……おにい、ちゃ……ん」

瞳から涙が流れ落ちる。胸に手を当て、少女は微笑む。

……お兄ちゃんが、私の中に。

少女は最愛の人の命と引き換えに、手に入れたもの。

『美佳、一緒にいるよ……愛している』

それは、”永遠の愛”なのかも知れない……。

（後書き）

思いつきで書いてみました。かなり説明不足の感があるかもしれませんが、感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4725a/>

シンクロ～伝えられない思い～

2010年10月8日15時20分発行